

平成 22 年 10 月 13 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

中斎塾 東京フォーラム

平成 22 年 第 9 回講話

今日の一冊 死への準備

最初に本をご紹介します。『日本人の見識』（木内孝著 日本文芸社）です。ご存知の通り、木内孝さんは当フォーラムの顧問でもあり、私の師匠である木内信胤先生の息子さんです。木内孝さんの書かれた本から共通して感じるのは、木内さんが人から強制されない、自分はこう思う・自分はこう行動する・自分は・・・というタイプの人だということです。

今日はこの本の中から、日本人の平均寿命について書いてあるところと、木内信胤先生ご自身について書かれたところをお話します。木内信胤先生は 70 代の頃から「僕は 94 歳で死ぬことになっている」と言っていました。そして実際に 94 歳で亡くなりました。ただ、ご自分の予定表にはもっと先まで予定が書き込んでありましたから、どこまで本当にそう信じていたのかは疑問ですが、自分は何歳で死ぬと公言し、その通りに亡くなったわけです。自分の死期をそう言えるのは、何の為せる技なのだろうと考えました。

私が漢文を教えて戴いた石川梅次郎という先生も 94 歳で亡くなりましたし、宇野精一先生も 94 歳で亡くなりました。結構年配の先生方は 94 歳で亡くなっていますので、それが摺り込まれて、私も 94 歳までは大丈夫だろうなと思っている次第です。自分の身の周りにおられる方を見ていると、大体それくらいの年齢までは生きられそうだなと漠然と思いますし、更にもうその方の日常生活や食生活、考え方を真似していくことによって、もしかするとその年齢を超えるだろうと思います。但し、途中で大きな病気をしなければという条件がつきます。

本の中で、木内孝さんが会社の健康診断で顔なじみになった女医さんに、「僕が死ぬとしたら、何が原因で死ぬでしょうか」と聞いたところ、その女医さんは即答せずに、「あなたが死ぬとすれば、事故だと思います」というメールが 1 週間後に来たそうです。ご本人も何度か事故で死にかけていましたから、ぐさっと突き刺さったそうです。畳の上で大往生する人と、あちらこちらを飛び回っている人は、なかなかそうはいかないと思いますが、ご自分の死ぬ時の状況を想像して、それに至る準備を少しずつされるがよいと思います。

嘘をつかなかったか・・・

では、お聞きします。

昨日一日、嘘をつかなかった方？

(・・・沢山手が拳がる)

昨日は良い日だったと思う方？

(・・・沢山手が拳がる)

有難うと言ひ、有難うと言われた方？

私は夜寝る時にこれらの質問を自問自答するのですが、最近途中で確認するようにしています。夜寝る時に思い出そうとしても、すっと思い出さないと気がつきましたので、一日のうち2、3回、何かの節目で考えてみると、夜寝る時に非常に早く思い出せます。

新しい質問を致します。

昨日、人さまの為に何かしてあげた方？

手を上げた方は極楽にいけますね。それを積み重ねればよいのです。

自分自身に、何か良いことをしてあげた方？

意外と自分の為というのをおろそかにする場合があります。時々、自分で自分にご褒美をあげるとしたら何だろうと考えるとよろしいでしょう。前回は申しましたが、私は自分で足の裏を揉むようになり、足に「どうも有難う」と言うようになりました。これは自分の身体に良いことをしているなと感じます。食事も、実に美味しいなと味わいつつ食べるようになりました。食べる量を1年くらい前の半分に減らしましたので、味わって食べざるを得なくなりました。味わって食べると実に美味しい。塩分も減らしましたので、少しの塩分でも美味しいなと感じるようになりました。

今日の論語

では解説を致します。本日の論語は雍也第六 5～12 です。

ご存知のように論語は何度も何度も口に出して読むのが良いし、読んでいる時に、その情景が目浮かんでくるようになると素晴らしい。それを現代に置き換えてイメージを作るのがよいと考えます。

【五】 しいわ子曰く、かい回やそ其のこころ心 さんげつ三月 じん仁にたが違わず。其の余は そ則 よち日 すなわひ つき月に いた至るのみ。

三ヶ月というのは、一、二、いっぱいという意味で、三ヶ月と区切ったものではありません。長い間と考えればよろしい。三ヶ月仁を思い続けて、仁に基づいた行動を続けるの

であれば、その後も自然と仁に基づく行いは出来るようになるという意味も入ります。

孔子が言うには、顔回は長い間、仁徳そのもののような心と行動をしている。他の弟子たちは、一日に一回、一瞬仁の心を持ったという自覚があるであろうし、ある者は一ヶ月に一回、一瞬仁の心を自覚したという者もいるであろう。

そういう者は皆、顔回をお手本にしてくださいとっています。

今の世の中で、仁を実行しているなどという人は聞いたことがないし、一所懸命考えてみても天皇陛下くらいではないかと思えます。天皇陛下の日常生活、お心・ご行動はこれを体現しているような気がします。そう考えると、日本人が日本人として生きていく上で、天皇陛下という存在は、間違いなく核(コア)になっているのだなと感じます。公平無私、私利私欲なし、天下万民のため、こういうものを公に出して、自然とそうだなと納得できるような存在は他の国々では聞きません。

先日、詩吟の皆さんと奉納吟詠大会で明治神宮を参拝しましたが、何となく厳肅な気持ちになるのは、勿論環境もあるでしょうが、今上陛下の行いが投影しているのではないかと感じます。

【六】 季康子きこうし問う、仲由ちゅうゆうは政まつりごとに従したがわしむべきかと。子曰く、由しや果ゆうなり。政まつりごとに従したがうに於おて何か有あらんと。曰く、賜たまや政まつりごとに従したがわしむべきかと。曰く、賜たまや達たつなり。政まつりごとに従したがうに於おて何か有あらんと。曰く、求もとや政まつりごとに従したがわしむべきかと。曰く、求もとや藝げいあり。政まつりごとに従したがうに於おて何か有あらんと。

季康子は魯の国の宰相です。季康子が孔子のお弟子さんたちを自分の国政に従事させようと考えて、誰を抜擢したらきちんとできるか、自信がないものだから一人一人孔子に確認をしています。季康子は孔子よりもはるかに若いので、君子儒の先生に聞いたわけです。

季康子が孔子に聞きました。

子路は国政に従事させても大丈夫でしょうか。

孔子が「子路は決断力があるから、政にあたるのに何も問題はない」と答えた。

子貢はどうでしょうか。

孔子が「子貢は世間の事情・事物に明るい。先見の明が非常にあるから、政にあたるのに何も問題はありませぬ」と答えた。

子貢は経済的な面でも非常な功績を上げるだろうし、世間の事情に非常に明るい。従って物事をきちんと早く捌くことができる。子貢について大丈夫かと聞くこと自体がおかしい

のではないかという気持ちが裏にあると感じます。「政に従うに於て何か有らんと」という書き方は、他の人も同じですが、これはちょっと強く感じます。

冉有はどうでしょうか。

孔子が「冉有は才能に富んでいるから、政にあたるのに何も問題はありませぬ」と答えました。

冉有は非常に多能・多芸、才能が豊か。したがって色々な案件を即断即決していくことが出来るから、国政が滞るようなことはないと言っています。

冉有が今の時代にいたらどうでしょうか。菅さんのように、誰かが何か言って言葉がコロコロ変わってしまうなことはない。尖閣諸島の問題であれば、物事の本質を考えて、<これは中国の常套手段である。中国という国は、日本に限らず他の国に対しても領土拡張をしている。そのやり方は、漁船を相手の国の船にぶつけて、その国の出方を見ながら、高圧的に領土拡張を当たり前のようにしていく。そういう仕組み・システムがあるので、それを一つひとつ実行していくであろうから、このように対応すべきである・・・>という具合です。冉有が今の日本にいて、菅さんの仕事をしているのであれば、そういう対応をするだろうと思います。相手をあまり考えないで、目の前に出てきたものだけに対応している。船長を釈放すれば中国は軟化するだろうと考えて手を打ったなどと、よくもまあ平然とマスコミの前で菅さんも仙谷さんも喋るものだと感じました。

【七】 季氏 閔子騫をして費の宰為らしめんとす。閔子騫曰く、善く我が為に辞せよ。
もし我を復びすること有らば、則ち吾は必ず汶の上^{すなわ}に在らんと。

閔子騫というお弟子さんは、顔回が亡くなった後、道徳的な行いをする人物では第一と言われています。

季氏が閔子騫を費というやっかいな地域の代官にさせようと考えた。

閔子騫は使いの者に「あなたは私の為によく言葉を扨んで、私が辞退しているとお伝え下さい。もしあなたがもう一度私に声をかけることがあれば、私は必ず斉の国に去ってしまうであろう」と言いました。

魯の国の北境に汶という川があります。閔子騫は季氏の下で働こうなどとは思わないので、自分は国を退去することになる。そういうことをさせないでもらいたいものだ^{すなわ}と使いの者に話をしています。

今の時代、誰かを抜擢しようと使いを出せば、それを待ち構えていてぱくっと食いつくでしょう。使いの者をたいそうもてなそうとする情景が目には浮かぶ感じがします。

民主党政権、自民党も同じですが、組閣をする際、マスコミが大臣になると思われる人の自宅に行っていて、呼び出しの電話の様子をテレビで伝えます。大臣という餌をぶらさげられて、ぱくっと飛びついていそいそと出かけて行く。何という情けない様子を流すのかと思います。

関子騫はそんな餌は食べないで、よその国に行こうとする。今の日本の大臣さんたちは、よその国に行くどころか、ぱくっと食いつきますね。

【八】 はくぎゅう やまいあ し これ と まど そ て と いわ これ うしな めい
伯牛 疾有り。子之を問う。窓より其の手を執りて曰く、之を亡わん。命
こ ひと こ やまいあ こ ひと こ やまいあ
なるかな。斯の人にして斯の疾有るや。斯の人にして斯の疾有るやと。

伯牛は孔子のお弟子さんで、らい病に伏せてしまった。

孔子がお見舞いに行って、窓から手をとって言いました。

「伯牛が死ぬのか。これを天命を言うのか……。これだけ素晴らしい人物である伯牛が、このような病にとりつかれて死んでしまうのか……。」

自分のお弟子さんや、会社で言えば自分の後継者に据えようと思う人間がいたら、色々教えてと思います。孔子の場合、顔回が自分の後継者であると思い、本人もそう思っていたのでしょう。しかし顔回は死んでしまった。伯牛も善行のある行いで有名な人です。その伯牛までも、らい病で死に至ろうとしている。自分が長生きしている間に、どんどん後継者と目した弟子たちは死んでいく。天が私を見放したのではないかと何とも悲しい歎息を漏らしています。

【九】 しいわ けん かい いったん し いっぴょう いん ろうこう あ ひと そ うれい
子曰く、賢なるかな回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂に
た かい そ たのしみ あらた けん かい
堪えず。回や其の楽を改めず。賢なるかな回や。

これは有名な科白なので、ご存知の方もいらっしゃると思います。

一簞の食、一瓢の飲とは、竹の器に盛った一杯のご飯と、ひさご（ひょうたん）一杯の水で食事を済ませる。

西郷隆盛は沖永良部島に流されて、断崖絶壁の上の波しぶきがかかるような所に粗末な小屋で監禁されました。西郷隆盛はそこで坐禅を組んで、一膳のご飯と水一杯と塩少々で牢獄生活を送りました。私は沖永良部島に行って、やせ衰えてあばら骨が浮き出て、骸骨

のような西郷隆盛の像を見ました。ご飯と水と塩少々だと、人間はこんなふうになるのかなと感じました。ですから顔回もこれだけの食事では生きられないと思いますので、多分栄養失調で死んだのではないかと思います。

孔子が言うには、顔回は実に徳が高い素晴らしい人である。粗末な食事、住まいも狭い路地の小屋に住んでいる。普通の人はその生活に耐えられない。しかし顔回はそういう生活の中でも道を楽しむ。人間としての道はどういうものかを追求して、それを楽しんでいる。だから顔回は素晴らしい人物だ。

孔子は、自分はなかなかそういうところまではいかないと思っています。顔回の食べるものと孔子の食べるものは、まるで違ったのではないかと思います。顔回のような食事ではやはり早死にするでしょう。孔子は七十代まで生きていますから、きちんとした物を食べていたと思います。孔子の食べものは、論語の中にこと細かく書いてありますが、腐ったものは食べない、行商人が売っているものは衛生的でないから食べない、自分の家の漬物を食べる等、食べものに関して非常に神経を使っていたようです。

顔回は粗末な食事を楽しみを求めていたから早く死んだ。素晴らしい顔回は・・・と孔子は言っていますが、なぜ食事の指導を孔子はしなかったのかと思います。

【十】 ぜんきゆういわ 冉求曰く、し 子の道よるこを説あらばちからたざるに非ず。力足らざればなりと。しいわ 子曰く、ちからた 力足らざる者ものは、ちゅうどう 中道はいにしていま 廢なんじす。今かぎ 女は画れりと。

冉求が言いました。「私は先生の教えを悦ばないのではありません。自分の力が足りないから、なかなか先生の教えを飲み込むことができないのです」

孔子が言いました。「本当に力が足りない者は、途中で倒れてしまうものだ。お前は今、自分で自分の限界を決めてしまったのだ」

力が足りないというのは、山登りをしている時に本当に力が足りなくなって、力が抜けてバツリ倒れてそのまま死んでしまう。そういう倒れ方をするのが中道にして廢すと言うのだ。しかしお前は自分で自分の限界を決めて、これ以上できないと勝手に言う。自分の限界を自分で決めてしまうからお前はだめなのだ。もう少し本気になりなさい、と孔子が叱咤激励をしています。

スポーツや武道をされる方は、身体で感じていると思います。例えば合気道で、一人で大勢を相手にする人は、フラフラになって倒れそうになる。疲労困憊で立ってられない状況まで来て、もうだめだと本人が思い、周りも思うところで、もう一度大勢が折り重な

ってその人を押さえつけようとする。そうすると疲労困憊で動けなくなっている寸前の人
が、どういう訳だか最後の力を振り絞って動くのです。最後の力を振り絞って相手と対応
した時の力が、本物の力になる。筋肉も違う筋肉が付いてきます。自分の頭の中で勝手に
<私は限界だな>と思って止めてしまうと、それまでです。

スポーツに限らず、お金の問題でも同じことが言えます。1千万円の貸したお金を回収し
ようとする場合、普通のやり方だと700万か800万くらいしか回収できません。<これだ
け頑張ったのだからよしとするか>と自分で努力したことを考えつつ、相手の状況を見て、
ここら辺で手を打とうと思うところで止めてしまうと、それでお終いです。けれども人間
的な話しをして、相手の心に触れるようなものを出して、どうにもならないなと思ってか
らが一つの勝負で、そこから先に何か道が開けてくる。そこに回収した人の実力がプラス
アルファされてくると思っています。

自分でもう終わりだなと思ったら、終わりです。終わりだと思ってから先に何か違った
道が開けると思って動くと、間違いなく新しい道が開ける。これは私自身、何回も経験し
ています。自分の経験を申しますと、色々な問題がどんどん降りかかってきて、畳の上に
大の字になって、<もう問題はいくら降りかかってもいい、これ以上は悪い話は来ないだ
ろう。どうにでもなれ>と諦めて、絶望感に浸って、<ああ、もうお終いだ>と本当に思
ったら、不思議なことに心の中にある留め金がカチッとはずれて、新しい智慧がどんど
湧いてきて色々な問題を処理することができました。

もう限界だと本当に思った時は、自分の隠れた能力が発揮できる時でもあると私は実感
しています。ダメだと思って、それでお終いにしたら、その人はお終いです。気持ちの問題で、
ダメだなと思って完全に絶望した瞬間に、先に何か光明が見えてくればしめたもの
で、その人の隠れた能力が心の奥の方から吹き出てくる。そういうことを信じておかれる
と良いと思います。

今の時代で言えば鳩山さんです。自分で火を点けておきながら普天間問題を放り出す者
があるものかと思います。普天間の問題はもう話がついていて、順調に日本とアメリカも
沖縄も、仕方がないということで進んでいた話だったわけです。それを自分で火を点けて、
今までの話をひっくり返して、もっと良い解決策があると言いながら、どうにも手が付け
られなくなって投げ出してしまった。鳩山さんは自分で自分を画ったのです。非常に情け
ない総理大臣だったと思います。

自分の周りを見回してみると、自分を含めて、「女は画れり」ということが結構あるの
ではないかと考えますので、ご注意くださいとよろしい。

【十一】 子^し子^{しか}夏^いに謂^{いわ}いて曰^いく、女^{なんじ}君子^{くんしじゅ}儒^なと為^なれ。小^{しょう}人^{じん}儒^{じゅ}と為^なること無^なかれと。

孔子が子夏に向かって言いました。

「お前は人格の完成を求める君子のような学者になれ。こせこせした口先だけの学者にはなるな」

渋沢栄一は君子儒の解釈を、「経世済民つまり世の為・人の為になることを天職と考えなさい。それが君子の行う儒である」と言っています。小人儒とは、学者であるが言葉の上だけで、現実に役に立たない実行できないようなものを弄ぶ学者を指しています。

子夏というお弟子さんは行儀作法にうるさい人でした。ですから孔子から見ると自分の孫弟子である子夏に対して、あまり細々としたうるさいことを言わず、行儀作法も重箱の隅を突くようなことをしない方がよい。お前は人格の完成を目指し、世の為・人の為のとなるような学者を目指しなさいとアドバイスしています。

翻って、今の学者はどうでしょうか。世の為・人の為をもって天職とするような学者を聞いたことがありません。責任を持たない、言葉だけの、言葉遊びをする学者は結構いると思います。

【十二】 子游^{しゅう}武城^{ぶじょう}の宰^{さい}と為^なる。子曰^しく、女^{なんじ}人^{ひと}を得^えたるかと。曰^いく、澹台滅明^{たんたいめつめい}とい^いう者^{もの}有^あり。行^ゆくに徑^{こみち}に由^よらず。公事^{こうじ}に非^{あら}ざれば、未^{いま}だ嘗^{かつ}て偃^{えん}の室^{しつ}に至^{いた}らざるなりと。

孔子の弟子の子游が武城という村の城主になった。孔子が「武城を治めるのにあたって、お前を補佐する良い人物を見つけたかい」と聞きました。

子游が「澹台滅明という人間を見つけました。真っ直ぐの太い道を歩いて行って、近道をしな。公用でなければ私の部屋にも来たこともありません。すべて公の動きでやっている。こういう人間は賢人なので、素晴らしい人物を得たと思っています」と答えました。

トップから見ると、良い右腕・左腕を持てば、その組織は順調に行くものです。今の民主党菅政権は澹台滅明のような人物がいるのでしょうか。仙谷さんがこの澹台滅明にあたるかなと感じますが、さてどうでしょうか。

会社でも自治体においても自分がトップであれば、右腕・左腕がいるだろうか時々考えるとよいと思います。いなければ作った方がよい。作りたいと思って動いていると、何と

が見つかるものだと思います。

知足の人生

中斎塾フォーラムの基本哲学は「知足」です。先ほどもご紹介した木内孝さんの本の中にも、「これからの世の中は、足るを知るという考え方を持っていなければ生き抜いていかれません」と「足るを知る」という言葉が所々に書いてあります。

毎回お聞きしています「嘘をつかない」「良い一日だった」「有難うと言ひ有難うと言われる」・・・これらは皆、知足の人生ですので、聞いていることに対してずっと手が拳がるようになると、知足の人生合格だなと思って戴いてよい。全然手が拳がらないと、足るを知る人生とはほど遠いと思って戴くとよろしい。

皆さんも時々基本哲学「知足」について思い出して、日常生活に使えるようにして戴くと良いと思います。

新聞の読み方

いくつか新聞のコピーをお配りしましたのでご覧ください。木内信胤先生は新聞を5紙購読していて、自分が気になる記事を赤鉛筆を引いてチェックしていたそうです。ある程度の数の新聞を読み比べしないと、新聞は怖いと思います。

<フジタの社員帰国について> (日本経済新聞 10/11)

この記事に関連するもので、<尖閣問題、香港で200人抗議デモ> <釈放された船長「また漁をする」> <中国土石流、日本からの援助引渡し>といった記事もあります。新聞は一見もっともらしいものを書くけれども、ここにある記事はパズルですから、1週間とか1ヶ月のサイクルで見えていくとパズルがだんだんはまってきます。

新聞を読む時には、何で？ 何で？ と思えば分かり易い。フジタの社員が拘束された。何で？ 軍事管理区域に侵入したとして拘束された。本当か？ 確かに軍事管理区域に入ったかもしれないけれども、拘束されて保釈金を払って釈放されるほどの大きな罪を犯したのでしょうか？

これはもう中国の領土拡大です。他の国の領土を分捕ってやろうという目論見がベースにあるから、パズルの根っこの部分はそこだと思います。自分の国の船長が日本に捕まっているのだから、船長を解放するまではこの4人は切り札になるということで捕まってい

るわけです。中国側は自分たちの論理でものを考え行動する。日本の国内法など念頭にありません。中国は自分の領土を増やそうという大義名分があるから、あとは全部ごり押しすればよいと思っているのです。中国人の船長が捕まっている。殺されることはないだろうけれども、日本人を4人捕まえたのだから、終いにはこいつらを殺すと言えば日本は頭を下げるのではないかと、瞬間的にそう考えたのではないかと。テロ、ゲリラと同じ感覚です。

確実に、日本政府はフジタの社員が殺されると踏んだので船長を釈放した。そう考えておかしくはないというパズルが一つ見えてきます。

<尖閣問題、香港で200人抗議デモ> (産経新聞 9/27)

中国政府は国内を炊きつけて、日本に対して抗議をさせることによって政府に対する眼をそらせ、自分たちは安泰、同時に自分たちの領土拡張の大きな手を一つ打ったのだと感じます。「日本側に謝罪と賠償を要求した」という事実は、日本人側からするととんでもないことです。ただし、これは中国の漁船が日本の巡視船にぶつかってきたという話が出されているからであって、中国側では逆に、日本の船がぶつけたという正反対の報道がなされているはずで、そしてどんどん中国の人々を、日本抗議に向わせるような煽り方をしていると感じます。

<釈放された船長「また漁をする」> (産経新聞 9/27)

「中国政府からの指示に基づく発言とみられる」とありますが、こういう発言があるからこういう書き方をするので、どこから発言が出てきたかまでは書かない。でもこれによって暗示をしています。

<中国土石流、日本からの援助引渡し> (産経新聞 9/27)

この記事については、まったく腹の立つものだと思います。日本は脅かされるとお金を出すという一つの例です。まるっきり関係ない事例です。

8月の土石流の災害に対して援助金を出すと日本は言っていたわけですが、それを実行したというものです。しかし言い方を変えると、中国が日本政府に対して、船長を逮捕し拘束している謝罪と賠償金を要求しているのだから、日本政府は別の理由のつくお金を中国に対して出したということです。中国にしてみれば、お金がもらえればよいのです。おそらく見えないところで日本政府は中国に対してお金を払っていると感じます。そういうことが新聞記事のパズルで、そこはかたなく見えてきます。

<うそをつく政権を監視する> (産経新聞 10/10)

民主党の細野前幹事長代理が中国にフジタの社員を出迎えに行った。それに対して、「政府は全くノータッチである」と前原さんが言ったことに対して、よくこれだけ嘘をつくものだという記事です。

中国に外務省のルートがまともに機能しないので、仙谷さんが自分の人脈を使って中国に打診をしたら話が少し進みそうなので細野さんを行かせた、ということが色々なものに出ています。それでいて前原さんが「政府はノータッチだ」と言っている。よく言いますね。

菅首相は「船長の釈放は検察の見解で、政府はまるっきりタッチしていません」と無責任な発言をしています。なぜ嘘ばかりつくのでしょうか。

政府が尻尾の見え見えの嘘ばかりついているという書き方をしています。産経新聞は結構極端な表現をしますからそのつもりで読まなければいけません、事実はずっと出ていきたいと思います。

<小沢氏会見 起訴議決を甘くみている> (産経新聞 10/8)

この記事で気になるのは、「判断を示した」という文章です。新聞を読んでいると、「官邸筋の話によると」とか、「政府高官の・・・」とかあります。官邸筋とは誰でしょうか。専門家に聞いてみると、「判断を示した」とは、文章を配らないで言葉で消えてしまうような形で喋っている。根拠を示せない談話・会話が「判断を示した」という表現になるのだそうです。ついでに「官邸筋」とは各省庁のトップクラスの官僚のことで、「政府高官」とは、だいたい大臣クラスの政治家の話ですが、名前を出さないとアドバルーンを揚げるといって、都合の悪い時にそういう表現を使うのだそうです。もう少しすっきり書けばよいと思いますが、色々な新聞をみると大体こういった書き方が当たり前になっています。

新聞を読む時には、自分の考えで、問題の本質は何なのか、本質を突き詰める読み方をされると良いと思います。そして気になった問題については、少なくとも3紙くらいを読み比べてみる必要がある。尚且つ、新聞用語に惑わされない。新聞用語はもっともらしいことが書いてあるから何となく納得させられたようになります。自分の見解が必要になると思います。

<劉氏は「犯罪者」中国が談話> (日本経済新聞 10/9)

ノーベル平和賞に絡んでの記事です。中国という国は自分に都合の悪いものには圧力を

加える、という非常に強烈なメッセージを世界に向かって発信したと考えます。自分の国の国内法で犯罪者と決めているのだから、犯罪者に対してノーベル平和賞を与えてはいけないとノルウェーに対して圧力をかけていて、「ノルウェーに対する対抗措置を検討しているとみられる」と書かれていますが、実行しています。中国は相当無茶苦茶な国だと世界に発信している、と新聞記事から垣間見れます。

<「牛鍋丼」投入が奏功 吉野家 19ヶ月ぶり増> (産経新聞 10/8)

私は牛丼が好きですが、食べ方を変えているものですから、量が多くてあまり行きません。普通の牛丼は、ご飯が 250 グラムなのだそうです。牛鍋丼にしたことによって、230 グラムに減らした。もともと吉野家の牛丼は築地が発生の地です。今も築地の場内にありますが、日本で第一号の牛丼店です。そこで創めたのは、たしか牛丼ではなくて牛鍋だったはずです。ですから原点に戻って牛鍋丼を作ったわけです。中身を減らして原価を下げて、他の店に対抗し 200 円競争に割り込んで利益を出し始めたなと感じました。

他の飲食チェーンも見てみると、トップが変わると利益が出ます。トップが変わって失敗すると、一変に落ち込んでいく。非常に単純明快な言い方をすると、会社が利益を出して発展してゆくのは、社長一人の功績だと思います。社長が悪ければ伸びるはずがない。それからもう一つ、いくら立派な社長であっても、途中でだんだん疲れますから、30 年以上社長をしている人の場合は考えた方がよいと思います。

会社が発展するのは社長の功績、会社がダメになるのは社長の責任と思っています。社長次第でどうにでもなっていくと思います。渋沢栄一さんも、会社のトップにしかるべき人物を置けば、その会社は必ず発展するし、天下りをトップに据えた場合、皆ダメになると明治時代に発言しています。そういうものを一つ一つ自分自身の判断基準の材料に取り込んでいかれるとよいと思います。

本日の講話は終了です。有難うございました。